

A県における助産師の大学院進学に関する意識

著者	高田 久美子, 若松 美貴代, 吉留 厚子, 下敷領 須美子, 井上 尚美
雑誌名	鹿児島大学医学部保健学科紀要=Bulletin of the School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
巻	24
号	1
ページ	13-17
別言語のタイトル	The Inclination of Midwives Hoping to Go to Graduate School in A Prefecture
URL	http://hdl.handle.net/10232/23891

A県における助産師の大学院進学に対する意識

高田久美子¹⁾, 若松美貴代¹⁾, 吉留 厚子¹⁾, 下敷領須美子¹⁾, 井上 尚美¹⁾

要旨 助産師の大学院への進学についての意識を明らかにし、今後の大学院進学を推進するための資料とすることを目的とし、2012年12月に3施設に勤務する助産師89名を対象に質問紙調査を実施した。

その結果、大学院への進学希望は「積極的に希望する」8人(9%)、「少し希望する」14人(16%)、「あまり希望しない」24人(27%)、「希望しない」20人(22%)であった。進学を希望する理由としては「スキルアップ」「キャリアアップ」「資格取得」「興味がある」が述べられた。進学を希望しない理由としては「専門学校卒業は入学できない」「興味なし」「仕事との両立が困難」「臨床の方が良い」であった。助産師の大学院進学に対する意識を高めるには、女性のライフサイクルを考慮した大学院の在り方が必要であり、また大学院の出願資格や大学院設置基準第14条による教育特例、長期履修学生制度に関する情報の認知を高める必要があることが分かった。

キーワード： 大学院, 助産師, カリキュラム内容

緒言

医療の著しい発展と社会の意識の変化にともない、看護職に求められる役割や責任は拡大し、専門職としての生涯教育の充実が求められてきている。「看護師等人材確保の促進に関する法律」制定後「質の高い看護師養成」を目的とし看護系大学、大学院の整備・充実が行われてきた。2013年度における看護系大学院は修士課程144校(入学定員2,434名)、博士課程71校(入学定員519名)となり、看護師・保健師・助産師の基礎教育を終了し国家免許を取得した看護職者(以下、既卒看護職者とする)が、より高度な専門職業人として自らの資質を向上させることができる教育環境が整ってきている。小松ら¹⁾が愛知県で行った大学院への進学希望に関する研究では看護師(32.2%)助産師(38.1%)保健師(36.0%)と職種の違いはみられていない。また、九州における助産師の大学院進学に対する意識は明らかにされていない。

離島を抱えるA県の周産期医療の現状は厳しく、28島の有人離島の内、産科医医療施設を有するのは5島・6施設のみであり、産科医が複数常駐している施設は1施

設のみである。このような現状から、離島で働く助産師に求められる能力は第一次救急に関する実践能力や地域が抱える課題を解決していく方略を導き出す能力が求められている。A県における助産師の生涯教育においてこのような能力を向上させることは重要であり、その一つとして大学院での学びは大きな役割を果たすものと考えている。

また、生涯教育を推進する目的で設けられている大学院入学資格審査や大学院設置基準第14条による教育特例の認知が低い状況が報告されているが²⁾³⁾、A県の就労環境を鑑みても、これらの特例を活用することがA県における大学院への進学率を高める方略になると思われるが、認知度に関する調査は見当たらない。

そこで、今回、A県における助産師の大学院への進学に対する意識について明らかにし、今後の大学院進学を推進するための資料を得ることを目的に調査を行った。

¹⁾鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻母性・小児看護学講座
連絡先：高田久美子
〒850-8544 鹿児島市桜ヶ丘8丁目35-1
Tel/Fax: 099-275-6792
E-mail: ktakada@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

研究方法

調査時期

2012年12月

調査方法

1. 調査対象

A県内の産科医療施設3施設に勤務する助産師を対象とした。

2. 調査方法

対象病院の看護部長に調査の目的を口頭で説明し協力依頼を行い、同意を得た後、調査用紙及び回答用紙を入れる封筒を持参し、看護管理者に配布を依頼した。対象者は看護部門の代表者に選定を依頼しており、看護師と助産師の配布数は不明である。調査には無記名自記式質問紙を用い、回収用の封筒に投函するよう依頼し留置き法にて調査を実施した。配布数220のうち、178人(80.9%)からの回答があり、そのうちの助産師89人を分析対象とした。

3. 調査内容

調査内容は、「大学院進学希望」について、「積極的に希望する」「少し希望する」「わからない」「あまり希望しない」「希望しない」の5段階で回答を求めた。また、「それらの回答を選択した理由」は自由記述とした。

分析方法

統計処理はSPSS Statistics21.0を用いて対象者の属性、進学希望、進学希望理由について記述統計処理を行った。また、自由記述の「それらの回答を選択した理由」については、質的帰納的に分析を行った。

倫理的配慮

研究対象者には研究目的、施設名を公表すること、個人名を匿名にすること、参加は自由意思であること、調査に協力しないことによる不利益はないことを文書に記載し、回収をもって同意がえられたものとした。

結果

1. 対象者の属性(表1)

年齢の平均は 32.9 ± 7.4 歳。20歳代が39人(45.3%)、30歳代が31人(36.0%)、40歳代が13人(15.1%)、50歳代が3人(3.5%)であった。

2. 大学院への進学希望について(図1)

89人中「積極的に希望する」8人(9%)、「少し希望する」14人(16%)、「わからない」23人(26%)、「あまり希望しない」24人(27%)、「希望しない」20人(22%)であった。

「積極的に希望する」「少し希望する」を『希望する群』、「わからない」を『わからない群』、「あまり希望しない」「希望しない」を『希望しない群』としてみると、『希望する群』22人(25%)、『わからない群』23人(26%)、『希望しない群』44人(49%)であった。

3. 年代別進学希望について(図2)

20歳代(39人)の『希望する群』は5人(12.8%)、『わからない群』は13人(33.3%)、『希望しない群』は21人(53.8%)であった。30歳代(31人中)の『希望する群』は10人(32.2%)、『わからない群』は5人(16.6%)、『希望しない群』は16人(51.6%)。20歳代・30歳代いずれも『希望しない群』が半数以上を占めたが、30歳代の『希望する群』の方が20歳代の『希望する群』よりも多かった。

表1 年齢構成

		n=86, 人数(%)
年代	20歳代	39(45.3)
	30歳代	31(36.0)
	40歳以上	16(18.6)
	無回答	3

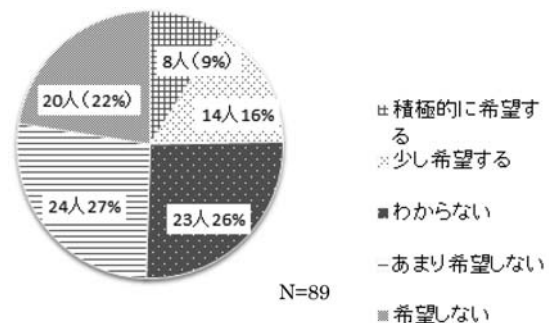


図1 進学希望の割合

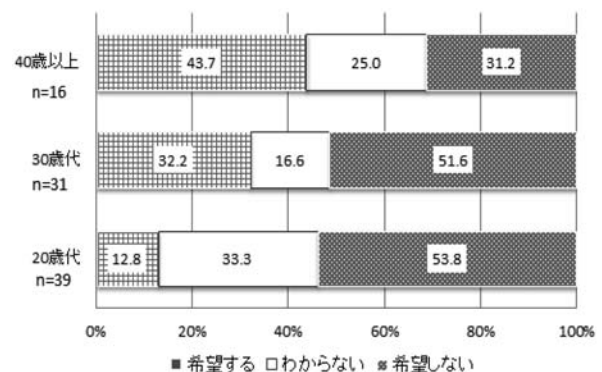


図2 年代別進学希望割合

40歳以上(16人)の『希望する群』は7人(43.7%),『わからない群』は4人(25.0%),『希望しない群』は5人(31.2%)であった。

4. 年代別にみた進学希望別理由

1) 進学を「希望する」理由について(表2)

20歳代では、「興味がある」「学びを深めたい」「キャリアアップ」「通学可能」が抽出された。30歳代では、「学びを深めたい」「スキルアップ」「興味がある」「学位取得」が述べられた。40歳以上では、「学びを深めたい」「興味がある」「スキルアップ」であった。各年代共に「学びを深めたい」「スキルアップ」「興味がある」が共通してみられた。

2) 進学を「希望しない」理由について(表3)

20歳代では、「臨床希望」「時間なし・仕事との両立困難」「経済的問題」「興味なし」「必要性不明」であった。30歳代では、「時間なし・仕事との両立困難」「情報不足(大卒でない)」「家庭(育児)」「興味なし」が抽出された。40歳以上では、「体力・年齢の問題」が述べられた。20歳代・30歳代では「時間なし・仕事との両立困難」が共通してみられた。

3) 進学について「わからない」理由について(表4)

20歳代では、「臨床希望」「必要性不明」「情報不足(仕事を辞めなければならない)」「興味なし」「イメージで

きない」が抽出された。30歳代では、「時間なし・仕事との両立困難」「情報不足(仕事を辞めなければならない)」「興味なし」であった。40歳以上では、「情報不足」「家庭(育児)」「体力・年齢の問題」「経済的問題」が記載された。いずれの年代で共通していたのは「情報不足」であり、20歳代・30歳代だけに共通していたのは「興味なし」であった。

考 察

今回の調査では、A県の助産師の大学院進学希望は対象者の1/4に留まり、約半数の助産師が進学を希望していない現状が明らかとなった。先行研究¹⁾⁴⁾⁷⁾では看護職者の進学希望は17~33%となっている。今回の調査は助産師のみを対象としており、単純に比較はできないが、看護職者の進学希望の割合と同じであることから、A県における助産師の大学院進学希望も他県の看護職者と同じ傾向であることが伺われた。また、今回、40歳代で進学を『希望する群』が高い割合を示しており、20歳代、30歳代でも年齢が上がるにつれ『希望する群』の占める割合が増加していた。今回の調査と対象の年齢構成がほぼ同じである先行研究⁴⁾では30歳代に進学を希望する者が多くみられたが、40歳代以上の進学希望者が多いことがA県の特徴と言える。

A県の助産師は、「学びを深めたい」「スキルアップ」「興味がある」という理由から大学院進学を希望していることが明らかとなった。看護大学院生の学習動機は、社会の複雑化・医療の急速な進展に伴い今まで受けてきた卒業教育や現任教育で学んだ内容では、現場の現状に合わせて応用して使用することに限界を感じるためであるとされているが⁵⁾、A県の助産師も多くの看護職者の年齢が上がるに従って「現場での限界」を少なからず感じているのではないだろうか。

一方、20歳代・30歳代では「時間なし・仕事との両立困難」という理由から半数近くの助産師が進学を希望していないが、一般的に20~30歳代の女性は発達課題として「仕事の成就」「家庭の形成と維持」などあげられており、社会でもプライベートでも役割が変化し、責任も重くなる時期にあたる。臨床現場では、ある程度仕事ができるようになり、助産師としての楽しさを実感し、さらに実践力を高めたいという時期である。また、プライベートでは結婚、出産、育児が重なり、仕事とプライベートに専念する時期であることも容易に想像できる。その一方で、40歳代以上は家庭や職場では様々な役割を担い、管理的な職位に就くなど役割の変化による「喪失」の体験という危機に直面しながらアイデンティティの再構築を行うと言われているが、これまで抱いてきた自己像、達成感や自信が揺らぐ時期で自分についての認知を再点

表2 進学を「希望する」理由

20歳代	30歳代	40歳以上
興味がある 学びを深めたい キャリアアップ 通学可能	学びを深めたい スキルアップ 興味がある 学位取得	学びを深めたい 興味がある スキルアップ

表3 進学を「希望しない」理由

20歳代	30歳代	40歳以上
臨床希望 時間なし・仕事との両立困難 経済的問題 興味なし 必要性不明	時間なし・仕事との両立困難 情報不足(大卒でない) 家庭(育児) 興味なし	体力・年齢の問題

表4 進学を「わからない」理由

20歳代	30歳代	40歳以上
臨床希望 必要性不明 情報不足(仕事をやめなければいけない) 興味なし イメージできない	時間なし・仕事との両立困難 情報不足(仕事をやめなければいけない) 興味なし	情報不足 家庭(育児) 体力・年齢の問題 経済的問題

検するとされている。このような発達課題から考えても20歳代・30歳代よりも40歳以上の進学希望が多くなることは納得できる。しかし、同時に年代特有の体力や年齢的問題により進学を希望しない状況もあり、学びたい気持ちはあるが年齢を経てしまった為に諦めてしまうことが推察される。成人教育学理論によると、成人の学習者は現実生活の課題や問題により学習の必要性を実感し、このような内発的誘因により学習が動機づけられ、学習への準備性を持つ。そのために、学習の方向付けは問題解決中心となるといわれている⁶⁾。今回の調査から年代の若い助産師は臨床での知を磨くことに邁進するが、その中で感じてきた課題や問題を積み重ねることで学習の必要性を認識し、年齢を経て学習意欲が高まるのではないかと考えられた。その学習意欲を満たし、課題や問題を解決するすべを学ぶ場の一つとして大学院がある。しかし、臨床での経験を重ねることは、年齢を重ねることであり、学習意欲だけでは進学に結び付けられない体力や年齢的な現実問題がある。学ぶ時期を逸さないためには、助産師としての学習意欲をいつ実際の学習へ結び付けていくのかということをも自分の人生設計の中で位置づけておくことが必要であると考えられる。2009年に文部科学省が大学改革推進事業として行った「看護職キャリアシステム構築プラン」(2010年より「看護師の人材養成システムの確立へ名称変更」では、8つの大学がキャリアシステム構築に取り組んでいるが、キャリア支援として「大学院への進学支援」が必須のごとく示されており、これからの看護職のキャリア形成における大学院の位置づけはさらに大きくなっていくと思われる。であればこそ、資格取得後、就職後に施設のキャリアシステムの中でキャリアパスを考えるのではなく、大学院進学の時期を逸さないために、学生の頃から自分自身の人生の中に大学院進学を将来のビジョンとして描いておくことが必要である。また、実際の臨床現場でも、大学院への進学や修了した先輩助産師の姿に触れられる機会がある環境であれば、さらにキャリアパスに大学院を位置付ける助産師も多くなるであろう。加えて、職場での大学院進学支援は大きな意味を持っており、今後さらに推奨されていくことを期待したい。

まとめ

A県の助産師の大学院への進学希望は、他の調査と同様な割合を示しているが、特に年齢を重ねる毎に進学希望が高まる傾向にあることが分かった。また、今回の調査から年代の若い助産師は臨床での実践を優先することで、この年代特有のライフイベントと重なり、進学ができない状況にあることが推察された。また、その後は年齢を重ねることにより、学習意欲は高まるが、体力や年

齢的な問題により大学院への進学を希望しなくなる状況があることが考えられた。学ぶ時期を逸さないためには、助産師としての学習意欲をいつ実際の学習へ結び付けていくのか、自分の人生設計とキャリアパスを合わせて考える必要があることが示唆された。

今後の課題

A県では1994年から他校ではあるが大学での看護教育がスタートしている。大学院進学希望者の割合が多かった40歳代の多くは出願資格審査(学校教育法施行規則第70条第1項第6号)の対象となることが考えられるため、これらについての情報提供が必要であろう。また、20歳・30歳代には、仕事との両立が可能である大学院設置基準第14条による教育特例や長期履修制度などの情報発信をさらに積極的に行っていくことが必要である。

引用文献

- 1) 小松万喜子, 平井さよ子, 曾田陽子, 他: 愛知県立看護大学の教育改革に関する調査(1) - 本学大学院への進学及び修了者雇用に関するニーズの概括 - . 愛知県立看護大学紀要2005; 11: 69 - 78
- 2) 小澤尚子, 坂江千寿子, 坂間伊津美, 他: 看護職の大学院への進学ニーズに関する調査. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 2009; 1: 71 - 77
- 3) 内田宏美, 津本優子, 小林裕太, 他: 島根県内の看護師のキャリア・ニーズと修士課程看護学専攻に対する認識. 島根大学医学部紀要, 2008; 31: 59 - 64
- 4) 江口秀子, 吾妻知美: 看護職の大学院への進学ニーズに関する調査 - A大学の実習関連施設に勤務する看護職を対象に - . 甲南女子大学研究紀要, 看護学・リハビリテーション学編, 2011; 5: 203 - 210
- 5) 高瀬佳苗, 横尾初美, 坂本成美, 他: 看護大学院生の学習動機. Quality Nursing 1999; 5: no.12: 979 - 984
- 6) 堀薫夫: 人間の発達と生涯学習. 2巻 第4章 成人教育学(アンドラゴジ-)を求めて, 亜紀書房, 東京, 1989; 230 - 237

The Inclination of Midwives Hoping to Go to Graduate School in A prefecture

Kumiko Takada¹⁾, Mikiyo Wakamatsu¹⁾, Atsuko Yoshidome¹⁾,
Sumiko Simoshikiryō¹⁾, Naomi Inoue¹⁾

1) Department of Maternal & Child Health Nursing, School of Health Sciences,
Faculty of Medicine, Kagoshima University
8-35-1, Sakuragaoka, Kagoshima City, 890-8544, Japan

Abstract

The purpose of this study was to clarify the inclination of midwives hoping to go to graduate school; and to prepare materials to promote graduate school entrance. A survey was conducted in December, 2012, using questionnaires sent to 89 midwives working at 3 different facilities.

As a result, their degrees of inclination of hoping to go to graduate school were: “really hope” - 8 (9%); “hope a little” - 14 (16%); “less likely” - 24 (27%); “do not hope” - 20 (22%). Also, “upskilling”, “career enhancement”, and “being interested in” were talked about as typical reasons for hope of entrance into graduate school. On the other hand, those who did not hope stated their reasons as “graduates of vocational schools may not enter”, “not being interested in”, “difficulties in balancing school works with practical jobs”, and “clinical work could be better to engage in”. We found two factors leading to raising awareness of midwives towards going to graduate school: firstly, significance of graduate school should be sought for realizing some support scheme giving consideration to women’s life cycles; and secondly, information should be further recognized about application qualification for graduate school, special educational measures according to Article 14 of the Graduate School Establishment Standard, and the System for Long-Term Completion.

Key words: graduate school, Midwife, curriculum contents